

訓往來には關東下向の大名高家の人々とありこの往來の出來しは南朝のとき也今八まん大めうといふことは八幡は源家の氏神にて弓矢の守護神なれば源氏の大名といふ事を八まん大めうといふなるべし

劍は箱に納め弓は袋に治るといふ  
詩經の周頌に明に昭なる有周式て位にあることを序つすなはち干戈を戟めすなはち弓矢を囊にすといふ詩ありこれ  
は周公の亂を治めたまひて天下太平になりたるゆゑ干戈を箱にをさめ弓矢をふくろにをさめ給ふことを賛て作りたる詩なり

突もうら／＼とのどやかにござれば

うら／＼ははるの日のながくのどかなるを云菅家文章の詩の二月三日遅々といふ句を聖一國師の點にきさらきやよひ日うら／＼と附られたりまた西行の山家集に「ことゝへはもてはなれたるけしき哉うら／＼かれなや人のこゝろ」といふ歌有これほこゝろのやすらかなるをいへり

太郎冠者

書言字考に往古いまだ官に任ぜざるものはたゞ太郎次郎と稱すとありて上にたつものを太郎といひ其次を次郎といひたる也さて冠者といふことは元服して間のなき若者をおほく冠者といへり木曾の冠者義仲蒲の冠者範頼などもわかき人の稱なりくわじやと云はくわんぢやの字をつめていふなるのさもの有かやい

書言字考の俗語に野風俗といふ字を出せり是はのふずといふことば也すていやしき事に野の字をつくるは漢土にも野鄙とかきてはいやしきことゝし野人と書ていやしき人とすること論語にもいたりこの方の俗語にもものらといふは放蕩なる若ものをいへりまた家に畜はぬ猫をのらねこといふは仲正の歌に「眞葛原下はひありくのらねこのな

つけかたきは妹かこゝろかとよみ給へりこれは野猫といふことにてらの字は付字也古今集のうたに庭もまかきも秋の野らなるとよみたる同じこと葉也されば此のさものといふは俗にいやしきものゝ無禮なる事をするをのさばるといふに同じくいやしめ云詞なるべし

野遊山などは何とあるふ

野遊山とは野に出てあそぶことをいふ俗語なり諺草に云晋の郭文弱きより山水を愛し名山にあそび老に至て終に盧を山中にむすびて住りこれを蒙求に郭文遊山としるせり今ぞくに遊樂することを遊山といふ郭文が遊山とは興味はなはだ異也といへりあんずるに遊山は山にあそぶとかく字なれば野にあそぶことを遊山とはいふまじき詞なれどこれはたゞ外へあそびに出ることをいひならはしたる詞なればしひてとがむべからざる物也其子細は三才圖會に遊山船といふものありて湖などに遊ぶ用としておほく酒を載る故遊山をもつて名とすといへりまた堯山堂外記にも遊山船を雇ふて石湖といふみづうみにゆきたる事もあれば野にあそぶことを遊山といふもあなかにあやまりとは定めがたし

此あたりの猿引でござる

續撰吟抄さる引の歌に「畜生もつかひいるれは中々にわれにはましの能のおほさよとよめりこの歌は文明のころの職人歌合にも入たりこの判者は逍遙院實隆公也漢土には猿引を狙公といふこと列子にみえたりまた唐晉統箴には弄猴人と有て弄して君王を一笑せしむとあれはまつたく日本のさるつかひと同じこと也  
たのふだ人の轍が

わが主人と頼みたる人といふ事を頼ふだ人と云なり轍の事は冬草に云矢を入るうつぼといふものは上古の書に見えず中興にできしものなるべし義家奥州後三年の合戦のとき舍弟義光奥州へ下らんとしけるととき相摸の國あしがら山

にてうつぼのうちより笙の譜をとりいたし豊原の時秋にさづけられしこと古今著聞集にみえたり東鑑に羽壺とかきたり空穂と名付しことはその中空にして外に毛皮をかけたる體粟の穂に似たれば空穂といふなるべし又鞞の字をうつほの字とするはあやまりなり本字は鞞かくのごとく書て是はゆきといふ字なり鞞は形異なるもの也春草に云むかしはうつといふもの有て腰につけたりしを後に穂を作りそへたるとて其うつといふもの、繪圖を武用辨略に載たり用ゆることなかれうつといふもの古書に嘗て見えず其繪圖も出所をいはず妄作なりと云々今あんずるにうつぼものかたり俊蔭の巻にとしかげの娘北山の奥なる熊のうつほ木の中にて子うみたる事をかけり熊のうつほは精華録には熊館とかきて古木の朽てうつろになりたる所を熊が臥所にすることをいふ也さればすべて中のうつろなる物をうつほといふゆゑこのうつほも其こゝろにて名づけたるものなるべし

しざりおろ  
すされといふに同し俗に下りおろふといふこと葉也  
いかい大名じやといふて  
いかいは大きなるといふこと葉也  
此大鴈股を以て

春草にいはく鴈股となづくる事は鴈のあしのゆびの股に水かきあるに似たればかりまたと名付しといふ説あり用ゆべからず鴈にかぎらず惣じての水鳥みな水かき有また俟とあればとてゆびのまたとするもいかゞ也ある人のいふは鴈俟といふはかへるまたなり蛙のまたのごとくなる故かへるまたといふこと葉を略してかるまたと云又轉じてかりまたとよびたる也其詞に付て鴈俟の字を宛用ひたるといへるは發明の説也用ゆべし  
きうしよがござります程に

院本に急所と書はあやまりにて本字は灸所なり灸をすゆる穴所のことにて其穴所を撲ば死するをいふ也  
ヤイましよ

猿をましよましよといふなり翻譯名義集にさるを天竺にては摩斯吒といふとありしかればましらは和訓にはあらずして梵語なるをそれを略してましともいふなるべしと讀たる歌は未木集猿の題にて「おもふこと大江の山に世中をいかにせましと三こゑなく也といふ兼昌の歌出たりましらとよみたる歌は古今集躬恒のうたに「わひしらにましらな鳴をあしひきの山のかひあるけふにやはあらぬ  
ならぬと申せば殿様の

秋草にいはく殿と稱すること禁中にて殿と稱するは攝政關白より外にいはず其外の人を表向にて殿といふ事も内々のうやまひ也いにしへよりありしこと也殿は宮殿の殿にて宮殿をかまへ居住したまふゆゑ殿といふ也されば攝政殿關白殿といひまた殿とばかりもいふ也神のことを太神宮八幡宮といふ宮とおなし意なりされば殿といふはいたつておもき稱也つねの人の名に殿と付てよぶは分にすぐる事なりされども内々のわたくしのうやまひに殿とよぶ也とあり様といふことはまへに註す

船こぐ眞似をしますか  
まねはまねぶといふことを略したる語にて學の字なり源氏ものがたり品定の所にさてありぬべきかたをばつくるひてまねび出すにそれしかあらじとそらにいかゞはおしはかりおもひくたさんとありこのまねび出すといふ詞もまねをして聞すといふこと也俗に眞似と書は後の世におしあてたる字なり  
畜生さへ物を知てなげくに

畜の字はかひやしなふといふこゝろ也昆婆娑論に横生は生を稟ること愚癡にしてみづから立こと能はず他のために

畜養せらるゝゆゑにちくしやうとなつくといへり  
物の哀をしらぬといふは

俊成卿の長秋詠藻に「戀せずは人はこゝろもなからまし物の哀れもこれよりそしる  
鬼畜木石におとつた

鬼や畜生や木や石やと物のあはれをしらぬ心のなきものを四つかぞへ立たる也俗にいはずればといふは人  
といふものはよく哀れをしろといふこゝろなり文選の鮑昭か詩に心木石にあらざれば豈感なからんやと作り白氏文  
集にも人木石にあらずみな情ありともつくれり伊勢ものかたりいは木にしあらねばこゝろくるしとやおもひけんと  
ありげんじ物語にもいはきならねばおもほししるともかけり歌によみたる例は順徳院御集に「人ならぬ石木もさら  
にかなしきはみつの小島の秋のゆふくれとよませたまへり

息災延命富貴萬福の御祈禱

息災は大日經に此は是息災の法也といふこと有てわざはひをやめるといふ事也萬福はもと詩經にいでたる字にて尺  
牘にみてたくといふかはりに萬福とかくこと翰墨全書に出たり祈禱は神にいのることなり  
猿がまいりてのふ仕る

藝能をすといふこと也前に註せしる引の歌にもわれにはましの能のおほさよとよめるは猿のげいのう數々ある  
をいふなり

御知行まさるめてたま

いせ物語にかすがの里にしるよしゝてある註に知行の事也と有眞名伊勢ものがたりには知由と書て其人の領知する  
ところよりをさむる米穀を知行米といふ也

人命草木増長すれば

人の命ものひ草木もます／＼おひのびるといふことなり

綾が千反錦が千反

續日本紀に元明天皇の和銅五年に伊勢尾張以下二十一ヶ國にはじめてあやにしきを織しむる事見えたり  
なばか佐古志か室がとまりか

那波佐古志室みな播磨の地名也

ふねのなかには

ふねの中には何とおよるぞとまをしきねにかぢをまくらにひんだのをどりをひとをどりといふ文句三絃本手の飛驒  
組末章なり

何とおよるぞ

寐ることをおよるといふは古き詞なり増かゞみに帝といづくにおよるぞと問ふよるのおとゞにといらふればと有物  
に倚かゝりてねる事也

楫をまくらに

夫木集公朝の歌に「わするなよ同しみなのかちまくらおもひ／＼にこきわかるともと讀り  
一のへいたて二のへいたて

幣をたてゝ祈禱するこゝろなり

三に黒駒信濃を通れ

八月十五日しなのより黒駒を引てみやこにのぼるを駒牽といふことは公事根源にみゆ

船頭とこのそゆうけんね

勇健とかきていさましくすこやかにりとよむ

はくさいこくより

百済國は新羅百濟高麗とてむかしは三つの國なりしが今はあはせて朝鮮國と成たるよし明史にみえたり  
普賢文珠のめされたる

文珠の獅子にのり給へるかたちは佛像圖彙にみえたり翻譯名義集に普賢と文珠と二つにして二つにあらずこの菩薩  
つねに一對とすといへり

千秋や萬歳の

秋といふ字はこゝにては春秋の秋に非ず説文に秋は禾穀熟する也とありてもものゝ成就する時を秋といふ也麥が熟す  
るゆゑ四月をも麥秋といふ類なりゆゑに千秋も千年といふにおなじ韓非子に君をして千秋萬歳の聲を聒しめんとい  
ふこと有王維の詩にも萬歳千秋聖君に奉ずとつくりてめでたき事に用ることば也

瑠 璃 天 狗 卷之五 終

昭和四年十月二十三日印  
昭和四年十月二十六日發行

特製  
第十八回配本  
追加募集  
第十四回配本

【非賣品】

帝 國 文 庫  
(第十篇)

紀海音淨瑠璃集  
並木宗輔淨瑠璃集

編輯者兼  
發行者

右代表者  
取締役社長

株式會社  
博文館

東京市日本橋區本石町三丁目十六番地  
大橋 勇吉

印刷者  
君 島 潔

東京市日本橋區本石町三丁目十六番地

發行所

株式會社

博文館

振替口座東京二四〇番

製版所 共同印刷株式會社  
印刷所 共同印刷株式會社  
製紙所 王子製紙株式會社  
製本所 井上製本所  
函所 香取製函所

512868

<p>明治二十二年三月</p>	<p>東京府立第一高等女子学校        附属幼稚园</p>	<p>東京府立第一高等女子学校        附属幼稚园</p>
<p>明治二十二年三月</p>	<p>東京府立第一高等女子学校        附属幼稚园</p>	<p>東京府立第一高等女子学校        附属幼稚园</p>
<p>明治二十二年三月</p>	<p>東京府立第一高等女子学校        附属幼稚园</p>	<p>東京府立第一高等女子学校        附属幼稚园</p>
<p>明治二十二年三月</p>	<p>東京府立第一高等女子学校        附属幼稚园</p>	<p>東京府立第一高等女子学校        附属幼稚园</p>



